



TITLE:

メチエ語の使役構文

AUTHOR(S):

桐生, 和幸

CITATION:

桐生, 和幸. メチエ語の使役構文. シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役の諸相 2019: 45-64

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245165>

RIGHT:

メチェ語の使役構文

桐生 和幸

1. はじめに

本稿では、メチェ語の使役表現の体系と使役表現が表す意味についてその詳細を論じる。まず、本節では、メチェ語の概要について本稿の目的である使役に関する事柄を中心に紹介する。ある程度の詳細なメチェ語の概要については Kiryu (2008) や桐生 (2010) を参照されたい。第2節では、メチェ語の使役表現のパターンを形態的な観点から論じる。第3節では、使役表現の統語的な側面として、参与者の項が取る格標示パターンについて論じる。第4節は、使役表現の意味的な側面に切り込み、各表現間の意味の差を論じる。

1.1. メチェ語の系統

メチェ語は、チベット＝ビルマ諸語のボド・ガロ (Bodo-Garo) 語支に属する言語で、ネパール南東のジャパ (Jhāpā) 郡で話されている。2011年の人口統計によると人口4867人、話者は4375人であるが、若い世代でのネパール語へのシフトがかなり進んでおり、ネパール国内では13の危機言語のひとつとして数えられている。

メチェ語の話者による自称は、Bodoであり、インド・アッサム州で公用語として使われているボド語 (Boro) とは方言関係にあり、また、ネパールに隣接するヒマラヤ山麓域の西ベンガル州北部で話されるボド語の方言とほぼ同じである (Kiryu, 2012)。

A map of Nepal



ネパールの地図とメチェ語の言語地域 (Meche & Kiryu 2012)

1.2. メチェ語の音韻

メチェ語の音素は, a, i, u, e, ə; k, g, ŋ, c [ts/tʃ], j [(d)z/(d)ʒ], t, d, n, p, b, m, y, r, l, w, s, h, ʔ である。また, ピッチの高低の違いによる語の弁別が見られるが, 本稿では声調の区別は省略して表記する。多くの TB 諸語で見られる無声閉鎖音の有気・無気の対立は, メチェ語では見られない。無声閉鎖音は一般的に語頭では必ず有気音として現れ, 語中でもおおむね有気音で現れる。閉鎖音は, 尾子音 (coda) として現れた場合は, 氣息の放出を伴わない。

1.3. メチェ語の動詞

メチェ語の動詞は, jaʔ (食べる), ja (なる), bai (買う), baiʔ (折れる) などの単音節動詞や undu (寝る) sitat (殺す) などの二音節語が多い。二音節語には, bigrai (<bigrinu) などの -ai で終わるネパール語からの借用語も見られる。

動詞は以下 (1a) のような形態的構成素を取ることができる。(1b) と (1c) はその例である。

- (1) a. 接頭辞 – 動詞基体 – 動詞補助辞 *n* – TAM 接尾辞

- b. jaʔ-jred-bai-yə

食べる - 少し - あちこち -HAB

あちこちで少しずつ食べて回る。

- c. da-ləŋ-ləŋ

PROH- 飲む - 去る

飲んでいくな。

四角の部分は, 動詞語幹 (verb stem) であり, 動詞基体 (verb base) に様態, アスペクト, 移動などさまざまな意味を付加する動詞補助辞 (verbal auxiliary suffixes) が *n* 個付くことができる。(1b) では, -jred が少量であることを表し, -bai が複数の場所を回って動作が行われることを表している。また, (1c) では, 唯一の接頭辞である否定命令接頭辞 da- が付いた例である。また, -ləŋ は, 英語の away のような働きをしており, 動詞につくと「～していく」という意味になる。

動詞基体は, 単独の語根動詞 (root verb) であったり複合動詞 (compound verb) であったりするし, 別の動詞語幹が動詞基体として働くこともある。また, 動詞語幹は, 単独で命令形として使うことができる。

動詞語幹の後には, テンス・アスペクト・モダリティ (TAM) に関する以下の語尾が 1 つだけ付く。すなわち, -ə (習慣), -a (非過去否定), -aʔ (過去), -i: (過去否定), -bai (既然), -a khəi (未然), -dəŋ (継続・既然), -nai (未来)

のどれかが必ず付き、組み合わせて使われることはない¹。メチェ語は、他のチベット＝ビルマ系諸語に見られるような否定の接頭辞は、否定命令の *da-* しかなく、平叙文の否定は、テンス・アスペクトと融合した形式で表される。

1.4. 格標示パターン

メチェ語の動詞は、自動詞 (intransitive)、他動詞 (transitive)、および、両用 (ambitransitive) の3つのタイプが認められる。メチェ語の格標示は、主格対格型であるが、自動詞の場合、意味役割に応じてS項の格標示が異なる。また、他動詞の場合、O項の格標示はA項との関係において決まる²。

1.4.1. 自動詞

メチェ語の自動詞は、項を1つ取り、その項名詞に現れる格標識は、ゼロの場合もあるが、明示的に現れる場合は、主格形式または対格形式のどちらかが動詞にの種類によって現れる。主格形式は、*=a* と *=ə* の2つがあり、対格形式は *=kəu* の1つである。

自動詞のS項が主格形式で現れる場合、代名詞には *=ə* が、名詞には *=a* が付くか、あるいは、ゼロ表示として何もつかない。

- (2) a. *aŋ(=ə) taŋ-bai.*
私 (=NOM) 行く -PFCT
私は行った。
- b. *ram(=a) taŋ-bai.*
ラム (=NOM) 行く -PFCT
ラムは行った。

対格形式をS項に取る自動詞の場合は、*=kəu* が必ず付き、格標示がゼロになることはない。

- (3) *aŋ=kəu gəjaŋ-bai.*
私=ACC 寒くなる -PFCT
私は寒くなった。

¹ 母音で始まる接辞の場合、前に来る動詞の末音節に合わせて /y/ などの子音が介入することがある。すなわち、(1b) のような場合である。

² メチェ語の格体系については、桐生 (2010) で報告したとおりであるが、その後、Kiryu (2014) で報告したように、名詞句階層 (人称代名詞 > 有生名詞 [人間 > 動物] > 無生物名詞) が格標示に関係していることが分かっている。紙幅の関係で本稿では、その点については触れないが、簡単に言えば、二項述語の場合、O項がA項と階層が同じか上位の名詞の場合、A項の取る主格格標識を省略することはできない、という制約がある。

1.4.2. 他動詞

他動詞は、二項述語の場合、動作主（A）と対象（O）とを項として取る。A 項は主格形式が付くか、あるいは、無標のままのゼロ標示のどちらかになる。また、O 項も対格形式が付くか、あるいは、無標のままゼロ表示のどちらかになる。代名詞の場合、A 項として現れる場合は、ゼロ標示のパターンまたは明示的な標示が可能であるが、目的語として現れる場合は、必ず明示的格標示となる。

- (4) a. bi(=yə) əŋkam(=kəu) ja-bai.
 彼(=NOM) ご飯(=ACC) 食べる -PFCT
 彼はご飯を食べた。

- b. aŋ(=ə) bi=kəu jaʔ-bai.
 私(=NOM) 彼・それ=ACC 食べる -PFCT
 私はそれを食べた。

三項述語の場合、A 項は主格になるが、受け手である R 項と対象である O 項は、与格－対格というパターンか、与格 / 対格－ゼロ標示というパタンかのどちらかになる。

間接目的語には与格 =nə が付き、直接目的語は二項述語の O 項と同じパターンとなる。ここには、「与格＞対格＞ゼロ」という格標示階層が働き、受け手は対象物を取る形式よりも上位の形式でなければならない。

- (5) a. bərai=ya aŋ=nə phəisa=kəu hə-bai.
 老人=NOM 私=DAT お金=ACC やる -PFCT
 老人が私にお金をくれた。

- b. bərai=ya aŋ=nə/=kəu phəisa hə-bai.
 老人=NOM 私=DAT/=ACC お金 やる -PFCT
 老人が私にお金をくれた。

2. メチェ語の使役表現パターン

メチェ語における使役事態の表し方には、以下の 3 つの種類が認められる。

1. 語彙的使役 (lexical causative)
2. 接辞付加による形態的使役 (morphological causative)
3. 従属節構造を活用した迂言的使役構文 (periphrastic causative)

語彙的使役は、所謂有対動詞の区別に関係し、迂言的使役構文は、所謂「使役」

に関係する。形態的な使役は、両方のドメインに関係するものもある。ここでは、語彙的使役形および接辞付加による形態的使役を使役動詞と呼び、迂言的な使役は使役構文として区別することにする。以下では、まず、使役動詞のタイプについて概観し、その後、使役構文のパターンと用法について検討する。

2.1. 使役動詞の形式

メチェ語では、自動詞、使役動詞、非使役動詞の形式的な対応関係を見た場合、Haspelmath (1993), Nichols et al. (2004), Comrie (2006) で議論されているもののうち、非使役動詞から使役化 (causative), 反使役化 (anti-causative), 両極化 (equipollent), 両用 (labile), 補充 (suppletion) の5つのタイプが認められる。Dixon (2000) の分類では、使役化、反使役化、両極化は形態的使役、両用および補充は語彙的な使役と分類される。桐生 (2015) では、Dixon の分類に従ってメチェ語の有対動詞のタイプを考察した。以下では、この議論をベースに、新しく認めた形態的使役のパターンについても加えて、メチェ語の使役形態パターンの概要をまとめる。

2.2. 語彙的使役

Dixon は、語彙的な使役のパターンとして、(i) 一つの動詞が自他両用で使える場合 (ambitransitive/labile) と (ii) die/kill のような異なる2つの語彙が使役・非使役で対応する場合とを挙げている (所謂補充)。メチェ語では、これら両方のパターンが見られる。ただし、次に述べる形態的使役に比べると数は非常に少なく、桐生 (2015) から引用すれば、両用が26ペア、補充が9ペアに過ぎない。両用は、特にインド・アーリア系の言語からの借用語に多く見られる。(6) の例は、メチェ語固有のもので、(7) はインド・アーリア系言語の借用語である。

- (6) bən 「巻く」, bəngidiŋ 「巻きつく・巻き付ける」, beŋte 「塞がる・塞ぐ」, he 「捻じれる・捻る」, məcib 「(目が・を) 閉じる」, pai 「曲がる・曲げる」, pehen/peher 「広がる, 広げる」, səlai 「変わる, 変える」, ton 「丸まる, 丸める」, paŋ(te) 「閉じる」

- (7) bigrai 「壊れる・壊す」, təpi 「加わる・加える」, dub-ai 「浸る・浸す」, bədl-ai 「変わる・変える」, ultaŋ 「ひっくり返る・ひっくり返す」

インド・アーリア系言語からの借用では、元の言語の語幹に -i または -ai という接辞をつけることで派生する。

以下の例は、補充タイプの対である。

- (8) əŋkat 「出る」－bohon 「出す」, go 「(毛・歯が) 抜ける」－pu 「(毛・歯を) 抜く」, ja 「(出来事が) 起きる」－dekaŋ 「(出来事を) 起こす」, ja? 「食べる」－dəu 「食べさす」, mən 「炊ける」－coŋ 「炊く」, ja 「生まれる」－gopai 「生む」, jəŋ 「燃える」－sau 「燃やす」, sidimən 「目覚める」－pəja 「目覚めさす」, təi 「死ぬ」－sitat 「殺す」

2.3. 形態的使役

Dixon (2000, 34) では、形態的な派生として (a) internal change, (b) consonant repetition, (c) vowel lengthening, (d) tone change, (e) reduplication, (f) prefix, (g) suffix, (h) circumfix の8つのパターンを挙げている。メチェ語では、(a), (f), (g) のパターンが見られるが、(a) と (f) のタイプが組み合わさったケースも見られる。ここでは、便宜的に (a), (f), および、(a) と (f) の複合タイプの形態的使役パターンを「I 型形態的使役」と呼び、接尾辞によるものを「II 型形態的使役」と呼んでおくことにする。この両者の違いは、使役の表す意味の範囲の差にも関係してくる。

2.3.1. 自動詞の初頭子音の交替

自動詞の初頭子音有声無気破裂音が同じ調音点・調音法の無声有気音になることで使役動詞になるパターンである。(9) の例を見ると、両極のようにも見えるが、初頭子音の無声無気音化は TB 祖語の使役接頭辞 *s- が付加したことに由来するものと考えることができ、他の TB 諸語でもよく見られる現象である。共時的なレベルでは、上述の (a) のタイプと考えられる。

- (9) bai? 「壊れる」－pai? 「壊す」, gau 「2 つに割れる」－kau 「2 つに割る」, geu 「開く・(空気が) 抜ける」－keu 「開ける・(空気を) 抜く」

2.3.2. 接頭辞付加による使役化

使役化に関わる接頭辞は、pV-, bV-, si- の3種類がある。V は、接続する動詞の語幹にある母音とおおむね調和する母音を示している。

- (10) a. ci 「濡れる」－pi-ci 「濡らす」, ceb 「狭まる」－pe-ceb 「狭める」, ham 「よくなる」－pa-ham 「良くする」, jəb 「終わる」－pə-jəb 「終える」, lau 「伸びる」－pə-lau 「伸ばす」, su 「冷める」－pu-su 「冷ます」, ju-tum 「集める」－pu-tum 「積み重ねる」, go-sor 「漏れる」－po-sor 「漏らす」
b. ju-tum 「集まる」－bu-thum 「集める」

- c. gab「泣く」－si-gab「泣かす」, gi「怖がる」－si-gi「驚かす」,
ji-kaŋ「起きる」－si-kaŋ「起こす」

3つの接頭辞で一番多いのがpV-パターンであり、それ以外のものは数が少なく、si-については、上の2つしか見つかっていない。また、putum, posor, butum, sikaŋのように、ももとの2音節語の1音節目が使役接頭辞で置き換わるような両極(equipollent)型も見られる。

2.3.3. 初頭子音交替と接頭辞の組み合わせによる使役化

上述の2つのパターンが融合したタイプがpV-, bV-, si-に見られる。

- (11) a. un-du「眠る」－pu-tu「寝かす」
b. geu「開く」－be-keu「開く」, gu「抜ける(歯・葉)」－bu-ku「抜く」,
go「抜ける」－bo-ko「引っこ抜く」, ji「破れる」－bi-ci「破く」,
jo「ちぎれる」－bo-co「引きちぎる」
c. ga「治る」－cə-ka「治す」, gau「ひび割れる」－cə-kau「ひびを入れる」,
gəmət「消える」－ci-kəmət「消す」
d. gə-glai「落ちる」－si-klai「落とす」

接頭辞のみの場合と同様に、2音節語の初頭音節と使役接頭辞が交替する両極(equipollent)型も見られる(putu, siklai)。

2.3.4. 接尾辞による使役化

接尾辞による使役化は、かなり生産的であり、メチェ語の形態的使役派生の大多数を占める。ここで関係する接辞は、-həであり、ももとは(12)のようにgiveの意味を持つ授受動詞である。また、これまで見た3つのパターンは、自動詞にしか付かず、自動詞から他動詞(使役動詞)を派生するものとみることができ、この接辞は、自動詞にも他動詞にも付けることができ、見た目上他動詞派生にも関与するし、(15)のように所謂「使役」構文の形成にも関係する。

- (12) aŋ syam=nə pəisa hə-bai.
1SG シャム=DAT お金 与える-PFCT
僕はシャムにお金をあげた。

- (13) a. bisa = ya undu-bai.

子供 =NOM 寝る -PFCT

子供は寝た。

- b. bima = ya bisa = kəu undu-hə-bai.

母 =NOM 子供 =ACC 寝る -CAUS-PFCT

母は、子供を寝かせた。

- (14) a. bom = a gau-bai.

爆弾 =NOM 破裂する -PFCT

爆弾が破裂した。

- b. ram = a bom gau-hə-bai.

ラム =NOM 爆弾 破裂する -CAUS-PFCT

ラムが爆弾を破裂させた。

- (15) ram = a sita = kəu taŋ-hə-bai.

ラム =NOM シタ =ACC 行く -CAUS-PFCT

ラムは、シタを／に行かせた。

この使役接辞は、上で見た接頭辞や初頭子音交替によって使役化された動詞につけることも可能である。

- (16) ram = a bisa = kəu lauti cipəi-hə-bai.

ラム =NOM 子供 =ACC 棒 折る -CAUS-PFCT

ラムは、子供に棒を折らせた。

しかし、すでに -hə を用いて作られた使役動詞にさらに使役接辞をつけることはできない。この場合は、(17b) のように迂言的使役使役構文を用いなければならない。

- (17) a. ram = a dəi = au muli gili-hə-bai.

ラム =NOM 水 =LOC 薬 溶ける -CAUS-PFCT

ラムは水に薬を溶かした。

- b. ram = a bisa = kəu dəi = au muli gili-hə-nə hə-bai.

ラム =NOM 子供 =ACC 水 =LOC 薬 溶ける -CAUS-SUB やる -PFCT

ラムは、子供に水に薬を溶かさせてやった。

2.3.5. 形態的使役の生産性

以上、形態的使役には3つのタイプの形態的使役があることを見た。それぞれの使役化パターンは、生産性において差がある。初め、便宜的に分けたI型形態的使役（初頭子音交替による使役化と接頭辞付加による使役化）は、決まった動詞、それも自動詞でしか見られない。「溶ける」という意味の *gili* を **kili* や *pə-gili* のように使役形を派生することはできないし、他動詞にI型形態的使役パターンを当てはめ、例えば、*bai*「買う」を *pai*, *cəbai/cəpai* のようにして「買わせる」という意味の使役形を派生することはできない。

それに対して、II型形態的使役とした接尾辞 *-hə* による使役化は、すべての動詞に適用できるので、*gili* と *bai* の使役形は、*-hə* をつけて *gili-hə*, *bai-hə* というように派生することができる。*-hə* は、基本的にどの動詞にもつけることができ、I型形態的使役で派生した使役動詞にもつけることができる。例えば、*ci-pai?*「折る」に *-hə* をつけて、*ci-pai?-hə*「折らせる」を派生することが可能である。

接頭辞使役接辞は、*pV-*, *bV-*, *cV-*, *si-* の4種類があることを見た。このうち、*si-* は明らかにPTBで想定されている使役・方向接頭辞 **s-* と同根であり、歴史的には最も古いと考えられる。

これら4つの接頭辞の付き方については、ある一定の法則が見られる。Meche and Kiryu (2012) の辞書データをもとに調べてみると、以下のようなことが分かった。

si- が付く語を見ると、*si-gi*「驚かす」、*si-gab*「泣かす」、*si-klai* (<*gəglai*)「落とす」、*si-kəma* (<*goma*)「隠す」のように、元の動詞の初頭子音が軟口蓋閉鎖音 /g/ であるという点で共通している。

また、*cV-* は、/g/ で始まる *cə-ka* (<*ga*)「治す」、*cə-kau* (<*gau*)「割る」があるが、他にも *ci-mau*「動かす」、*ci-pai?* (<*bai?*)「折る」があり、この二つに共通するのは、初頭子音が両唇音 (/m/ と /b/) である点である。

pV- がつく自動詞の初頭子音に軟口蓋閉鎖音 (/k/, /g/) と両唇閉鎖音 (/b/, /p/) で始まるものはなかった。両唇の鼻音 /m/ で始まるものは、唯一 (*pə-mən*「炊く」< *mən*「炊ける」) が1つだけ認められた。

bV- は、*pV-* の異音のようにも見えるが、どちらも /j/ で始まる自動詞に付く。ただし、*pV-* の場合は、*jam*「古くなる」> *pə-jam*「古くする」のようにそのままつくが、*bV-* の場合は、*jo*「ちぎれる」> *bo-co*「ちぎる」のように元の動詞の初頭子音が無声無気音化する。

表1は、4つの接頭辞がどのような初頭子音を持つ動詞につくかをまとめたものである。接辞付加の場合、上で見たようにそのままの動詞の音に変化せずにつく場合と、無声無気音化してつく場合とがある。音変化を伴わず付くものには+を付す。無声無気音化する場合は、元の動詞の初頭子音には+を付し、接辞が付いた時の初頭子音には*を付すこととする。

表1 接頭辞使役接辞と初頭子音の関係

接頭辞\子音	p	b	m	t	d	n	c	j	s	k	g	h	r	l	w
pV-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	+	+	+
bV-	-	-	-	+	-	-	*	+	-	*	+	-	-	-	-
cV-	*	+	+	-	-	-	*	+	-	*	+	-	-	-	-
si-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-

先に述べたこと以外で、この表から分かることは、以下のとおりである。

(i) pV- の場合、1つの例を除き初頭子音交替を伴わない。唯一の例外は、undu>putu「寝る>寝かす」のペアだけである。

(ii) pV- と bV- は、おおむね相補分布をなしているとも言えるが、/j/, /t/ では相補的ではない。ただし、/j/ で始まる語の場合 bV- が付くと /c/ に交替する (jo>bojo「ちぎる>引きちぎる」) が、pV- の時は、そのままつく (jam>pəjam「古くなる>古くする」) という違いがある。また /t/ の例は、jutum「集まる」、putum「積み重ねる」、butum「集める」のみで、初頭音節の交替として現れるものである。

2.4. 迂言的使役構文

迂言的使役は、動詞 hə が補文を取ることで形成される。パターンは (17b) や (18) および (19) のように V-nə hə となる。ここでの hə は、元来の語彙的意味である「与える」という意味は失っていると言える。

- (18) aŋ-kəu sinema nai-nə hə.
 1SG-ACC 映画 見る -SUB やる .IMP
 僕に映画を見させて。

- (19) “oho, jirai, babu, jirai, jirai, dandəice jirai.”
 おお 座る .IMP 坊や 座る .IMP 座る .IMP 少し 座る .IMP
 jirai-nə hə-bai, bi burəi = ya.
 座る -SUB やる -PFCT その 老人 =NOM

「さあ、坊や座った、座った、座った。ちょっと座りなさい。」その老人は座らせた。

3. 統語的特徴

本節では、メチェ語の使役構文の統語的な特徴を論じる。論じる内容は、使役構文において使役者、被使役者等が取る格標示パターン、および、使役構文の構造について論じる。格標示パターンについては、非使役事態が自動詞を含む場合と他動詞を含む場合とを見る。使役構文の構造については、統語的に単文構造なのかそれともそうでないかをそれぞれの使役表現パターンについて検討する。

3.1. メチェ語の使役表現に現れる項の格標示

3.1.1. 非使役事態が自動詞を含む場合

第1節で見たように、自動詞文の主語であるS項には、主格を取るタイプと対格を取るタイプとがある。主格標識 =a/=ə は省略可能だが、対格標識 =kəu は、省略できないということを見た。

主格標識を取る動詞を使役構文にした場合、もとのS項である被使役者は、対格標示を受ける。ただし、対格標識は省略が可能である。

(20) 語彙的使役

- a. duwar(=a) geu-bai.
 ドア (=NOM) 開く -PFCT
 ドアが開いた。
- b. aŋ duwar(=kəu) keu-bai.
 1SG ドア (=ACC) 開ける -PFCT
 僕はドアを開けた。

(21) a. si ci-bai.

服 濡れる -PFCT

服が濡れた。

- b. bisa=ya si(=kəu) pici-bai.
 子供=NOM 服 (=ACC) 濡れる -PFCT
 子供が服を濡らした。

(22) 形態的使役

- a. cəima=ya kat-dəŋ.
 子供 (=NOM) 走る -CONT
 犬が走っている。
- b. bisa=ya cəima(=kəu) kat-hə-dəŋ.
 子供 =NOM 犬 (=ACC) 走る -CAUS-CONT
 子供が犬を走らせている。

対格を S 項に取る自動詞は、感覚を表す動詞が多いが、使役にした場合、非使役事態の S 項は、そのまま対格として現れ、省略はできない。

- (23) a. aŋ=kəu meŋ-bai.
 私 =ACC 疲れる -PFCT
 私は疲れた。
- b. bisa=ya aŋ=kəu meŋ-hə-bai.
 子供 =NOM 私 =ACC 疲れる -CAUS-PFCT
 子供が私を疲れさせた。

許容を表す使役構文の場合も同様である。

- (24) aŋ bisa=kəu jirai-nə hə-bai.
 私 子供 =ACC 座る -SUB やる -PFCT
 私は、子どもを座らせてやった。

3.1.2. 非使役事態が他動詞を含む場合

他動詞からは、形態的な使役構文か迂言的使役構文のどちらかを作ることができる。この場合、他動詞の元の動作主である被使役者は、与格または対格のどちらかになるが、基本的に元の他動詞の目的語が無標である場合は対格として現れる方が自然である。

- (25) a. gələi=ya əŋkam jaʔ-bai.
 子供 =NOM ご飯 食べる -PFCT
 子供はご飯を食べた。

- b. aŋ gələi=kəu əŋkam jaʔ-hə-bai.
 私 子供=ACC ご飯 食べる -CAUS-PFCT
 私は、子供にご飯を食べさせた。

しかし、他動詞の元の目的語が (26a) のように対格マーカーを伴っていたり、(26b) のように文末に置かれ文脈的に被使役者に焦点が当たるような場合は、与格になる。

- (26) a. aŋ gələi=nə əŋkam=kəu jaʔ-hə-bai.
 私 子供=DAT ご飯=ACC 食べる -PFCT
 私は、子供にご飯を食べさせた。
- b. coŋ-nan kau-nan jaʔ-hə-bai, gələi-pər=nə bə.
 調理する -CP 分ける -CP 食べる -CAUS-PFCT 子供 -PL=DAT も
 ご飯を作り、分けて食べさせた、子どもたちにも。

少なくとも、元の手動詞の対象が対格マーカーを伴っている場合、与格にすることはできないので、使役構文でも DAT > ACC > ゼロという格の階層関係が反映されている。

迂言的使役構文の場合も、形態的使役と同じで、元の手動詞の動作主は、使役文では対格か与格で表され、その目的語が対格マーカーを取る場合は、与格にならない。

- (27) a. ram=a sita=kəu mani pidiŋ-hə-bai.
 ラム=NOM シタ=ACC マニ車 回す -CAUS-PFCT
 ラムはシタにマニ車を回させてやった。
- b. ram=a sita=nə mani=kəu pidiŋ-hə-bai.
 ラム=NOM シタ=DAT マニ車=ACC 回す -CAUS-PFCT
 ラムはシタにマニ車を回させてやった。

3.2. 使役構文の構造

最後に、語彙的使役は、単一の節構造を持つものに対して、形態的使役は埋め込み文のような構造を持つ可能性があるを示す。メチェ語には、gaunə という表現がある。意味としては、「一人で・自分で」という意図的動作による動作であることを表す場合と「自然に」という自発的な動作であることを表す場合のいずれかに解釈が可能である。

- (28) a. ram=a bi=kəu gaunə banai-bai.

ラム=NOM それ=ACC 自分で 作る -PFCT

ラムがそれを自分で作った。

- b. duwar=a gaunə geu-bai.

ドア=NOM 自然に 開く -PFCT

ドアが自然に開いた。

この gaunə を用いて解釈テストを行うと、語彙的使役と形態的使役の構造の違いが分かる。

- (29) a. ram=a duwar=kəu gaunə keu-bai.

ラム=NOM ドア=ACC BY.SELF 開ける -PFCT

ラムは、ドアを自分で開けた。(≠ ドアが自然に開くようにした。)

- b. ram=a duwar=kəu gaunə geu-hə-bai.

ラム=NOM ドア=ACC BY.SELF 開く -CAUS-PFCT

ラムは、ドアを自分で・自然に開くようにした。

(29a) の語彙的使役の場合は、どのような文脈を与えても、ドアが自然に開くように仕向けるという自発的な解釈は成り立たず、ラムが自分で・一人で開けた、という動作主的解釈のみが成立する。それに対して、(29b) は、文脈なしではドアが自然に開くように仕向けた、という自発的な意味で解釈される傾向が強いが、他の人の助けを借りずに、という文脈を与えてやると、(29a) とは異なり、動作主的な解釈も可能である。

語彙的使役の場合も同じことが言える。

- (30) a. aŋ oma=kəu gaunə sitat-bai.

私 豚=ACC BY.SELF 殺す -PFCT

私は自分で豚を殺した。

- b. aŋ oma=kəu gaunə tət-hə-bai.

私 豚=ACC BY.SELF 死ぬ -CAUS-PFCT

私は自らが豚を死なせた。・私は豚が勝手に死ぬようにした。

(30a) では、gaunə が指すのは、動作主である「私」だけであるが、(30b) では、使役者の「私」でも被使役者の「豚」のいずれかでの解釈が可能である。豚を指す場合は、豚が自ら死ぬように仕向けたという意味になる。

以上のことを見ると、語彙的使役、I 型形態的使役では構造的に単一の節から

なるが、II 型形態的使役では、使役事態の中に非使役事態が埋め込まれた構造であることが伺える。

また、迂言的使役構文は、*-nə* という目的を表す不定従属マーカールを取ることから、表面的にも単一節ではないことが分かるが、事実、*gaunə* をつけた場合、使役者と被使役者のどちらでも指すことができる。次の例では、1 の位置に置かれた場合、「私」を指すのに対して、2 の位置に置かれた場合は、「レンタ」を指す。

- (31) *aŋ gaunə₁ rentə=kəu gaunə₂ gidiŋ-nə hə-bai.*
 私 BY.SELF レンタ=ACC BY.SELF 回る-SUB やる-PFCT
 私は、自分₁でレンタを自分₂で回らせた。

4. 使役表現の意味的特徴

使役事態は、意味的な観点から使役者 (causer) と結果事態の主体である被使役者 (causee) との関係によって直接使役 (direct causation) と間接使役 (indirect causation) のように分けられるのが通例である。特に、使役者と被使役者の非使役事態に対するコントロールの程度と被使役者の主体性 (volition) の度合いにより、両者は連続的に関連している。

最も典型的な直接使役では、非使役事態が完全に使役者のコントロール下に置かれ、被使役者にはコントロールも主体性もない。このような事態は、(32) のように被使役者が無生物であり、非使役事態の動作が自発的なもので、使役動詞が自動詞に対する他動詞として働くような場合である。メチェ語では、このような場合の他動詞は、語彙的使役と I 型形態使役の動詞がこれに該当する。

- (32) a. *lauti=ya bai?-bai.*
 棒=NOM 折れる-PFCT
 棒が折れた。
- b. *ram=a bi lautikəu cipai?-bai.*
 ラム=NOM その 棒=ACC 折る-PFCT
 ラムはその棒を折った。

これに対し、(33) では、使役者は被使役者が行う事態を監視し、そこに介入し止めさせることのできる余地はあるけれども、積極的に関わるものではなく、非使役事態の遂行は被使役者が主体的に行うもので、非使役事態の成立を許容するという間接使役の例である。

(33) ram = a bisa = kəu gele = nə hə-bai.

ラム = NOM 子供 = ACC 遊ぶ = PURP やる -PFCT

ラムは子供を遊ばせてやった。

Dixon (2000: 62) は、使役動詞になる動詞の性質、使役における使役者と被使役者の性質の違いによって使役構文の意味的範囲を規定するために (34) 9つの意味変数を設定している。

(34) a. Relating to the verb

1. State/action

状態動詞だけが使役化の対象となるか、それとも動作動詞も対象となるか。

2. Transitivity

使役化の対象となる動詞の他動性との関係。

b. Relating to the causee (Original S or A)

3. Control

被使役者に動作の支配権があるか。

4. Volition

被使役者が動作を行う意思がある。

5. Affectedness

全体的に影響を受けるのか、部分的な影響なのか。

c. Relating to causer (in A function in the causative construction)

6. Directness

使役者が直接的にその事態の達成に関与しているか。

7. Intention

使役者が意図的に使役動作を行うのか、非意図的なのか。

8. Naturalness

使役動作を無理なく遂行できるのか、それなりの労力を伴うのか。

9. Involvement

使役者が被使役動作を被使役者とともにやっているか。

9つのパラメータのうち、メチェ語の使役構文の差に関わるのは、5, 7, 8以外の6つのパラメータである。パラメータ5については、部分的な影響を受けるのか全体的な影響を受けるのかの区別は、メチェ語では使役構文の選択に関係しない。また、被使役者の意図性や自然性についても使い分けの区別には関係しない。7の意図性についても、メチェ語では直接は関係しない。文脈次第で意図的・非

意図的どちらの解釈も可能であり、殊に非意図的な状況を表すならば、*-pənaŋ* という補助動詞接辞をつけることが可能である。また、8 も使役構文の成立・選択にメチェ語では無関係で、「無理に」という意味は *-tar* という動詞補助接辞で付け加えることができる。

関係するパラメータのみまとめると以下の表 2 のようになる。

表 2 メチェ語の使役構文に関する使役パラメータ

			語彙的使役	I 型形態的使役	II 型形態的使役	<i>-nə hə</i>
Verb	1	State/action	変化自動詞	変化自動詞	すべて	すべて
	2	Transitivity	変化自動詞	変化自動詞	すべて	すべて
Causee	3	Control	－	－	±	＋
	4	Volition	－	－	±	＋
Causer	6	Directness	＋	＋	±	－
	7	Involvement	＋	＋	±	－

メチェ語では、語彙的使役と I 型形態的使役（初頭子音交替型・接頭辞付加型）は、使役のパラメータに関して違いがない。これらの使役動詞は、実質的に自動詞に対し二つの項を取る他動詞として機能していると言える。II 型形態的使役（接尾辞 *-hə* を付加する使役）は、あらゆる動詞が対象となり、使役者・被使役者のパラメータも動詞の元の意味と文脈によって決まり制約がない。迂言型は基本的に許可を与える使役構文であるため、非意志動詞がこの構文には現れにくい、まったく不可能ではない。この点は、後の方で例を見て説明する。

動詞についてのパラメータ 1 と 2 に関しては、コンピュータと存在動詞だけは使役化の対象とはならないということが共通する。語彙的使役と形態的使役は、変化を表す自動詞だけが対象となる。メチェ語では、状態を表す述語の多くが変化自動詞に状態化接頭辞 *gV-* をつけることで派生される（例：*hai* 低くなる > *ga-hai* 低い）。このような動詞は、すべて *pV-* をつけて使役を派生する（例：*hai* > *pa-hai* 低くする）（桐生（2016）参照）。

接尾辞型の使役は、すべての動詞が対象となる。このことは、語彙的使役や形態的使役の対象となる自動詞でも、*-hə* をつけた使役化が可能であることを意味する。例えば、前節で見たように、*gau* 「割れる」に対する使役形は *cəkau* という接頭辞＋初頭子音交替というパターンによる他動詞があるが、*gau-hə* という接尾辞による使役形も可能である。

- (35) a. dəihu gau-bai.
壺 割れる -PFCT
壺が割れた。
- b. aŋ dəihu cəkau-bai.
私 壺 割る -PFCT
私は壺を割った。
- c. aŋ dəihu gau-hə-bai.
私 壺 割れる -CAUS-PFCT
私は壺を割れるようにした。

(35b) と (35c) の違いは、前者が他動詞として機能しており、使役者が直接叩くなどして壺が割れるという事態を引き起こしたことを意味するのに対して、後者は、そのような意味で用いることもできるし、直接的でなく割れるように仕向けたり、第3者を介して割った場合でも用いることができるという点にある。

ちなみに、非意志動詞が迂言的使役構文に使われた場合、使役者が非使役事態の発生を許容するという意味になる。例えば, gau「割れる」で考えてみよう。(36)の文は、壺にひび割れが入り始め、割れてしまうのは時間の問題だが、割れても仕方がないと考え、何もせずにそのままにしておいた結果、壺が割れた、という場合である。

- (36) aŋ dəihu gau-nə hə-bai
私 壺 割れる -SUB やる -PFCT
私は壺を割れるにまかせた。

意志動詞の場合も、接頭辞型使役の対象となる自動詞に -hə をつけて使役が可能である。例えば、「寝る」という意味の undu に対する使役形は, putu および undu-hə の両方が可能である。putu は、形態的には undu の du を初頭子音交替で tu にし、それに使役接頭辞 pV- をつけたものと見ることができる。

- (37) a. gəlai=ya undu-bai.
子供 =NOM 寝る -PFCT
子供は寝た。
- b. bima=ya gəlai=kəu putu-bai.
母 =NOM 子供 =ACC 寝かす -PFCT
母親は子供を寝かしつけた。

c. bima = ya gəlai = kəu undu-hə-bai.

母 =NOM 子供 =ACC 寝る -CAUS-PFCT

母親は子供を寝かせた。

(37b) は、例えば、子供を抱いていて、揺らしながら眠りにつかせるような状況を表す。それに対して (37c) では、寝かしつけるような解釈も可能だが、歌を歌ってあげて眠るようにしたり（パラメータ 6 と 7 は +）、寝なさいと指示して寝かせたり（パラメータ 6 は +, 7 は -）する場合に使うことができる。基本的には「寝るようにする」という意味だと見ることができ、子供が自らの意志で眠ってもよいし（パラメータ 3/4 は +）、無理やり（薬で）眠らされた場合（パラメータ 3 と 4 が -）でも構わない。

5. 結論

以上、本稿ではメチェ語の使役表現パターンについて論じてきた。メチェ語では、使役は語彙的使役、形態的使役、迂言的使役の 3 つのタイプがあり、形態的使役は初頭子音交替、および、接頭辞付加による I 型形態的使役と接尾辞付加による II 型形態的使役の 2 つにわけることができる。語彙的使役と I 型形態的使役は、gaunə の解釈から単一の節からなる構造で、自動詞に対する語彙的な他動詞として機能しているとみなせるのに対し、II 型形態的使役と迂言的使役は非使役事態節を埋め込み構造として持つ可能性を見た。

統語的な特徴として、使役文における各参与者の格の現れ方について検討した。その結果、被使役者が取る格は、非使役事態の中に含まれる他の参与者の取る格標示によって異なってくることを明らかにした。

また、接頭辞型の使役では、4 つの接頭辞の分布パターンを接続する動詞の初頭子音との組み合わせから、ある一定の法則性があることを明らかにした。これらの接頭辞について同系統の他の言語との比較や TB 諸語との関連から今後考察を深めることが課題として残っている。

最後に使役表現の意味的な側面について Dixon (2000) の使役に関するパラメータを用いて分析を行った。ここからも、語彙的使役・I 型形態的使役は語彙的な他動詞として機能していることが裏付けられたと言える。

略号

ACC : accusative 「対格」, CAUS : causative 「使役」, DAT : dative 「与格」, HAB : habitual 「習慣」, IMP : imperative 「命令」, LOC : locative 「所格」, NOM : nominative 「主格」, PFCT : perfect 「已然」, PL : plural 「複数」, PROH : prohibitive 「禁止」, PURP : purposive 「目的」, SG : singular 「単数」, SUB : subordinator 「従属接辞」, 1 : 1 人称

参考文献

- Comrie, B. (2006) Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. *Linguistics* 44(2), 303–318.
- Dixon, R. (2000) A typology of causatives. In: Dixon, R. M. W., Aikhenvald, A. Y. (Eds.), *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 30–83.
- Haspelmath, M. (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Comrie, B., Polinsky, M. (Eds.), *Causatives and Transitivity*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 87–120.
- Kiryu, K. (2008) *An outline of the Meche Language—a Grammar, Text and Vocabulary*. Report for 2007 Grant-in-Aid for Scientific Research (No. 17720093) granted by the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Tsuyama: Mimasaka University.
- Kiryu, K. (2012) Western Bodo dialects in Nepal and northern West Bengal. 美作大学・美作大学短期大学部紀要 57, 9–18.
- Kiryu, K. (2014) Case-marking and animacy hierarchy in Meche. A paper presented at 20th Himalayan Languages Symposium, Nanyang Technological University, Singapore, 18 July 2014.
- Meche, S. L., Kiryu, K. (2012) *Meche–Nepali–English Dictionary*. Jhapa: The Council of the Meche Language and Literature.
- Nichols, J., Peterson, D. A., Jonathan Barnes (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8, 149–211.
- 桐生和幸 (2010) 「メチェ語の格体系」澤田英夫 (編) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 213–237.
- 桐生和幸 (2015) 「メチェ語の使役動詞の形態的特徴」パルデシ・ブラシャント, 桐生和幸, ナロック・ハイコ (編) 『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』くろしお出版, pp. 239–255.